



ルクセンブルク語ヴィルツ方言話者の言語生活： 2014年の調査から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2016-04-27 キーワード (Ja): ルクセンブルク, ルクセンブルク語, ヴィルツ方言, 方言の継承 キーワード (En): 作成者: 田村, 建一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00008875

ルクセンブルク語ヴィルツ方言話者の言語生活

2014 年の調査から *

田村 建一

Communicative Practices of Speakers of Wiltz Dialect of Luxembourgish: A Report Based on the Interviews Conducted in 2014

Kenichi TAMURA

要旨：ルクセンブルクは、ルクセンブルク語を国語とし、さらにこれにドイツ語とフランス語を加えた三言語を公用語とする多言語国家である。ルクセンブルク語は、主として話し言葉での使用に限定されていたが、近年文章語としての使用も増加している。それに伴い標準ルクセンブルク語が浸透しつつあるが、一方で方言がまだよく用いられる地域もある。本稿では、方言が保持されている地域として知られるルクセンブルク北部地域のヴィルツで実施した方言話者に対するインタビュー調査の結果を報告し、彼らの言語生活において方言が持つ意味と今後方言が継承される可能性について考察する。

キーワード：ルクセンブルク、ルクセンブルク語、ヴィルツ方言、方言の継承

1. はじめに

ルクセンブルクは、神奈川県あるいは佐賀県とほぼ同じ面積の領土に約 56 万人（2015 年 1 月現在）が住む小さな国である。この国はルクセンブルク語、フランス語、ドイツ語の三言語を公用語に定めており、教育制度もこの三言語の修得をめざす独特なものになっている。三言語の中でルクセンブルク語は、ドイツ語モーゼル・フランケン方言が 19 世紀前半以来の様々な文章語化のプロセスを経て標準語化された、いわゆる拡充言語（Ausbausprache）であり、法的にも 1984 年の言語法で唯一の国語（langue nationale）として定められた、いわば新しいゲルマン語の一つである。¹

ルクセンブルク語は、文章語としては国会議事録や議員による質問主意書や大臣による回答書で使用されるほか、毎年数多く刊行される文学作品にも、また最近はメール配信の日刊紙 Dageszeitung でも使用されるなど、特にニューメディアの領域での使用を急速に増やして

いるが、数十年前までは主として話し言葉として使用されてきたため、地域変種（以下、方言と記す）もよく保持されている。標準ルクセンブルク語は中部方言に基づくが、Gilles (1999) の調査に示されたように、北部方言と東部方言が話される地域では、高学歴若年層の間でもよく方言が使用されている。

本稿は、言語法制定以来標準ルクセンブルク語の使用が増えつつある中で、方言話者がどのように標準語と方言を使い分けているのか、周囲の人たちの方言使用状況はどうか、などの点を中心に、北部方言地域にあるヴィルツ (Wiltz) で行ったインタビュー調査の結果を報告し、ルクセンブルク語話者の言語生活において方言がもつ意味と今後方言が継承される可能性について考察するものである。

本論の前に、ルクセンブルクが多言語国家となった歴史的背景と現在の言語使用状況について次章で説明する。

2. ルクセンブルクの歴史と多言語使用状況

2.1 歴史的背景

ルクセンブルクの歴史は、アルデンヌ伯であったジークフリートがルクセンブルクの城塞 (Lucilinburhuc) を建て始めた 963 年に遡るとされている。彼を始祖とする中世ルクセンブルク家は、徐々に領地を拡大し、婚姻を通じてボヘミアも獲得した 13 世紀から 14 世紀にかけては、神聖ローマ皇帝を何代かにわたって出すほどの勢力を持つにいたる。しかし、カール 4 世 (= ボヘミア王カレル 1 世) の後は、所領の分割が進み、ルクセンブルクは 1443 年にブルゴーニュ公フィリップ (善良公) の支配下に入る。さらにその後、周辺国の領土や王位継承をめぐる争いの影響を受け、スペイン・ハプスブルク家、オーストリア・ハプスブルク家、そして 18 世紀末にはフランス革命政府の支配を受ける。ウィーン会議での大国間の駆け引きと調整の結果、1815 年にルクセンブルクは一種の緩衝地帯として独立の大公国となるが、大公はオランダ国王が兼ねることになる。その後、1839 年のロンドン条約によって当時ルクセンブルクに所属していたフランス語圏の地域 (現在のベルギー・リュクスンブール州) がベルギーに割譲され、それ以降ルクセンブルクはドイツ語圏から成る領土として確定する。19 世紀末には、オランダ国王の男系の相続者が絶えたことにより、ルクセンブルク大公はナッサウ家に受け継がれ、現在に至る。

ブルゴーニュ公国の支配下に入って以来、ルクセンブルクでは公用語としてフランス語が用いられてきた。オーストリア・ハプスブルク家の支配の下でも、ルクセンブルクを含む低地地方全体がフランス語圏と見なされたため、ウィーンの中央政府との文書のやり取りにはフランス語が用いられた。大公国としての独立後も、また 1839 年にフランス語圏の地域を失った後も、公用語としてのフランス語の地位には変化がなかったが、1834 年の大公命令によって新たにドイツ語も公用語の地位を獲得した。ただし、フランス語は現在でも言語法第 2 条の規定により立法の唯一の言語であり、特に公的領域においては威信をもっている。

独立後、徐々に国民意識が形成されてくるとともに、ルクセンブルクで話される独自のドイツ語 (現在のルクセンブルク語) が国民アイデンティティの象徴として捉えられるように

なり、ルクセンブルク語による文学作品が書かれたり、正書法を確立しようとする試みが行われたりするようになる。1912年にはルクセンブルク語が学校教育の科目になり、ドイツ語に準じた正書法が定められる。ただし、この時点ではまだ各地域方言間の調整による標準化は図られなかった。

ルクセンブルク人の国民意識とルクセンブルク語との強い結びつきを決定づけたのは、二度にわたる世界大戦時のドイツによる占領である。特にナチスドイツは、言語をはじめルクセンブルク人をドイツ人に同化させようとしたため、戦後、ルクセンブルクではドイツ語への反感が残り、国会ではそれまでドイツ語を使用していた議員もルクセンブルク語を使用するようになるなど、ドイツ語は使用領域のいくつかを失った。それに対しルクセンブルク語は、戦時中に女大公シャルロッテが亡命先からラジオを使って、それまでの慣例を破りフランス語ではなくルクセンブルク語で国民に呼びかけたこともあり、戦後はさらに威信を増した。他の言語の方言とは異なり、ルクセンブルク語は社会階層や年齢に関係なく国民同士の会話では一般に用いられる。1984年の言語法がルクセンブルク語を国語として規定したのは、そうした現状を追認したものと捉えられる。

1880年代に鉱床が発見されてから、ルクセンブルクでは鉄鋼業を中心とする産業化が進んでいたが、近年はむしろヨーロッパにおける金融の中心として発展している。こうした経済的な発展を背景に、この数十年間に外国人居住者が急増している。2015年1月現在の人口約56万人のうち、ルクセンブルク人は約30万人（約54%）であり、残り約26万人（約46%）が外国人である。これを1947年の人口（約29万人）と比較すると、現在はその2倍近くあり、人口に比して外国人の移住が非常に多いことがわかる。現在の外国人居住者のおもな出身国は、ポルトガル（約92,000人）、フランス（約39,000人）、イタリア（約20,000人）、ベルギー（約19,000人）、ドイツ（約13,000人）であり、総じてロマンス語圏の国が多い。²

2.2 多言語教育と外国人教育の問題³

こうした外国からの移住者の増加によって、学校教育の現場は外国人児童生徒教育という大きな課題に直面している。多言語国家であるルクセンブルクでは、小学校（6年制）の授業が主としてドイツ語を媒介として行われているが、例えば家庭でポルトガル語を話す子どもたちにとって、これは大きなハンディとなっており、実際に授業に付いていけない子どもの比率が平均よりも高いことが問題視されている。この問題への対策の一つとして、小学校での授業をフランス語で受けられるコースの設置を提案する識者もいるが、この提案に対しては、教育制度の統一性の破壊につながり、将来社会を二分する事態を招く恐れがあるとする反対意見もある。今後の議論の展開が注目される。

なお幼稚園は2年間の通園が義務付けられているが、そこでの保育はルクセンブルク語で行われる。これは外国人の子どもたちがルクセンブルク語を修得することで、小学校入学後のドイツ語修得が容易になることが目的の一つであるとされている。

ルクセンブルクの中等教育を担う学校種は、大学進学を前提とする7年制のリセ・クラシック（単にリセとも呼ばれる）と普通教育とともに職業教育も行うリセ・テクニク（コー

スや専門分野により5~7年制)の二つである。小学校の段階から教科としてのドイツ語とフランス語の授業がかなり多くの時間を占めるが(授業時間の3分の1以上)リセ・クラシックにおいても英語を含めた言語教育が大きな比重を占めている。また、リセ・クラシックの上級の4つの学年では主としてフランス語を媒介に授業が行われるため、卒業生はドイツ語圏の大学のみならず、フランス語圏の大学に入学することも可能である。国内にも2003年に創立された(学生の受け入れは2005年から)ルクセンブルク大学があるが、そこでの授業はフランス語が圧倒的に多い。

リセ・テクニクにおいては、語学の授業時間数は、コースや分野によって大きく異なるが、総じてリセ・クラシックよりも少ない。観光分野など言語教育を重視する専門分野がある一方で、上級学年では実習中心のカリキュラムが組まれ、言語教育があまり行われない専門分野もあるようである。

言語教育の中でルクセンブルク語の占める比重は小さく、小学校の6年間と中等教育の1年目において教科としてのルクセンブルク語が週1時間教えられることになっている。ドイツ語とフランス語という二大言語文化圏の狭間にあって、これら二つの言語を使わざるをえない環境にある中で、国語よりも独仏両言語の修得が優先されるのはやむを得ないことであろう。

2.3 領域ごとの言語使用状況⁴

三つの公用語の領域ごとの使用状況の概略は以下のとおりである。まず、立法の言語がフランス語であるため、行政府の文書は主としてフランス語で書かれる。裁判においては裁判官、検察官、弁護士はフランス語を用いるが、証人はどの公用語を用いることもできる。国会の議論には第二次大戦前まではフランス語かドイツ語が用いられたが、戦後は主としてルクセンブルク語が用いられている。選挙では、演説、ポスター、ビラともに主としてルクセンブルク語が用いられる。

企業の文書には主としてフランス語が使用される。企業内の口頭のコミュニケーションに用いられる言語は、大きな差をもってルクセンブルク語、フランス語、ドイツ語の順である。新聞に関しては、紙媒体の新聞では圧倒的にドイツ語の記事が多いが、新聞社のウェブサイトにはドイツ語版の他に、フランス語版、ポルトガル語版、英語版も設置されている。ロマンス語圏出身の居住者と通勤者の増加を受けて、2005年頃からフランス語の日刊紙も刊行され、平日の朝に駅や通りに置かれている(広告収入による経営のため無料)。また、2009年から登録者にメールで無料配信されるRTL-Dageszeitung、(www.rtl.lu)が刊行されており、そこではすべての記事がルクセンブルク語で書かれており、読者からのコメントもほとんどがルクセンブルク語によるものである。

ルクセンブルク語によるラジオ放送は1959年から、テレビ放送は1969年から行われている。テレビ放送は当初は毎週日曜日に2時間だけであったが、1991年10月からは毎日放送されている。

ルクセンブルク人の95%がカトリック教会に所属しており、また外国人居住者に関しても

カトリックの信者が多数派である。カトリック教会の公式言語はかつてドイツ語であったが、1970年代以降、ミサでルクセンブルク語が使われることが多くなっている。同じミサの中で複数の言語が使用されることも珍しくはない。また、フランス語話者やポルトガル語話者、イタリア語話者のためのミサも行われており、新聞のミサの案内には使用言語も記される。

最後に、電子メール等が普及する前の状況ではあるが、私的な内容の手紙での言語使用は以下のものであった。全体としてドイツ語が最もよく用いられるが、ただし社会階層による差が大きく、高い階層ほど私的な手紙でもフランス語を用いる割合が高くなる。1986年の教育省の調査によると、私的な手紙でルクセンブルク語だけを用いる人が約10%おり、これも含めて最もルクセンブルク語を用いる人は約25%であった。次章で示す本稿の調査結果から、この場合手紙で使用されるルクセンブルク語には標準語だけではなく、方言で書かれた場合もあった可能性があると考えられる。

もちろん現在は、手紙よりも電子メールや携帯メール、ラインの方が圧倒的に多く用いられるが、筆者の知人たちからの情報によると、そこで用いられるのは、ルクセンブルク語話者の場合、主としてルクセンブルク語のようである。また、後述のように、方言話者の中には方言でメールを書く人もいる。

以上がルクセンブルクにおける言語使用状況の概略である。簡単にまとめると、公的な領域でのフランス語の優位は歴史的な背景をもつものであり、現在でも動かしがたい状況にあるのに対し、初等教育の媒介言語であり、文章語として最も使いやすい言語であったドイツ語が、ニューメディアの普及とともにルクセンブルク語にその地位を若干奪われつつある状況が見られると言える。

3. ヴィルツ方言話者へのインタビュー調査

3.1 調査地と調査協力者

筆者は2005年に学校におけるルクセンブルク語教育の調査のためにルクセンブルク市内のリセを訪問したさい、ヴィルツ在住の男性教員からヴィルツ方言で書かれた演劇の台本（『オズの魔法使い』の翻案）を入手することができた。⁵ その教員によれば、ヴィルツでは誰もがふだんはヴィルツ方言を話しているとのことであった。また後日、筆者が実際にヴィルツに立ち寄り、通りがかりの若い男性に方言使用について訊ねたところ、方言を話し言葉として使うだけでなく、メールも方言で話すように書くとのことであった。ルクセンブルク語の標準化が進展する中で、方言が世代を超えて用いられ、しかも文章語としても使用されることに興味を抱いたのが、ルクセンブルク語北部方言話者の言語生活について調査を始めたきっかけである。

筆者は2013年に北部のヴィルツ地区とクレルヴォー地区で、また2014年にヴィルツ地区で方言話者に対するインタビュー調査を実施した。⁶ 本稿では、2014年8月下旬から9月上旬にかけてヴィルツで行った4人の調査協力者に対する調査の結果を報告する。

ヴィルツ (Wiltz) はルクセンブルク北西部にあるヴィルツ地区の中心地であり、ルクセンブルク市から電車で1時間弱の所にある。この町は、ナチスドイツ占領下にあった1942年8

月31日、徴兵制の導入に反対して実施されたゼネラルストライキの中心地であり、その指導者6名が逮捕され、即決裁判の後に銃殺されたことから、受難者の町（Cité Martyre）と呼ばれている。また、この地帯は第二次大戦末期にアメリカ軍とドイツ軍の間で繰り広げられたアルデンヌ攻防戦の舞台となり、甚大な被害を受けた場所でもある。

ヴィルツ自治体のホームページによると、2015年8月1日現在のヴィルツの人口は6553人である。そのうち3346人（51%）がルクセンブルク人、3207人（49%）が外国人であり、外国人の比率が国全体（約46%）よりもやや高い。外国人の国籍を多い順に6つ挙げると、ポルトガル人1333人、ベルギー人509人、セルビア人223人、フランス人189人、ボスニア人150人、モンテネグロ人110人である。旧ユーゴスラビアの出身者が、ここに挙げたほかにコソボ人（40人）を加えると523人に上るが、これはヴィルツの人口構成上の特徴と言えるであろう。

なお、国籍別の人口構成は不明であるが、ヴィルツ自治体のこの数十年間の人口の推移は次のとおりであり、1985年からの30年間で2倍以上に増えたことがわかる。2858人（1985年）、4240人（1995年）、4577人（2005年）。⁷

調査協力者の4人（以下W-1、W-2、W-3、W-4と記す）の性、年齢、職業は次のとおりである。全員がヴィルツで生まれ育っている。

- W-1 男性、50歳代後半、小学校教師
- W-2 男性、20歳代前半、会社員
- W-3 女性、20歳代後半、幼稚園教師
- W-4 女性、10歳代後半、大学生

調査協力者のうちW-1氏は、前年（2013年）にインタビューをしたヴィルツ出身のA氏（男性、60歳代前半）の弟さんである。A氏は、ヴィルツ方言話者として、ルクセンブルクの国立文学資料館（Centre national de littérature）のJean-Claude Conter館長に紹介していただいた。W-2氏とW-3氏は、ヴィルツ方言を話す若者としてW-1氏に紹介していただいた。W-4氏は、W-1氏を介して知り合ったヴィルツ在住の日本人女性の娘さんである。

質問の内容は、過去および現在の家庭生活、学校生活、職業生活での言語使用、ルクセンブルク語正書法の習得、周囲の人たちの方言使用などについてである。インタビューは、予め用意された質問に沿って進めながら、その答えに応じて話題を展開する形で、各調査協力者に対し1時間強行った。また、W-1、W-2、W-3の3人にはヴィルツ方言の中で最も顕著な特徴である「破裂音t/dの前における長母音または二重母音の軟口蓋音化」（例えば、標準ルクセンブルク語のhaut「きょう」に対するヴィルツ方言のhakt）に関する語彙調査も実施した。それにより若年層のW-2、W-3の2人も、この特徴をW-1氏と同程度に保持していることが確認できた。ただし、本稿ではこの語彙調査については扱わない。

以下、調査によって得られた情報をいくつかの項目に分け、各調査協力者が自ら述べる形の文章に直して報告する。[注：・・・]の部分は、筆者による補足説明である。W-4氏を除

き、インタビューはドイツ語で行われた。W-4 氏に対しては日本語で行った。以下の情報には、インタビュー後のメールのやり取りで得られたものも含まれる。⁸

3.2 W-1 (男性、50 歳代後半、小学校教師)

略歴：ヴィルツの小学校を出た後、エシュテルナハ [注：ルクセンブルク東部、ドイツとの国境沿いにある] のリセに入り、7 年間寮生活をした。その後、ウィーンの大学で 10 年間学んだ。ルクセンブルクに戻り、画廊の経営を経て、1999 年から小学校に勤務している。

3.2.1 家族・親類との会話

ホテルを経営する両親の下で育った。兄弟は、兄と妹がいる。両親ともヴィルツ出身で、家族・親類のほとんどがヴィルツ方言を話していた。母方の祖父だけが出身地のエッシュドルフ [注：Eschdorf、ヴィルツの南 10 キロほどの位置にある] の方言を話したが、理解に支障はなかった。母方のおばは結婚してパリに住んでいたが、ヴィルツへ来ると方言を話した。またルクセンブルク市内で歯医者をしていた母方のおじも、ふだんは標準ルクセンブルク語を話していたが、ヴィルツへ来ると方言を話した。

両親や祖父母にとって、標準ルクセンブルク語を使う機会は日常生活にはなく、ルクセンブルク市に買い物などに行った時に標準ルクセンブルク語を使うよう試みたようだ。父から聞いた話こんなエピソードがある。父と知人がルクセンブルク市へ行く汽車の中で一緒になった。二人とも最初はヴィルツ方言を使って話していたが、汽車がルクセンブルク市に近づくにつれて、お互いの話し方が少しずつ標準語に近づいていき、到着する頃には標準語で話していたとのことである。⁹

私自身が初めて標準ルクセンブルク語を聞いたのは、週末に両親の仕事上の知人がルクセンブルク市から来てホテル (= 家) で食事をする時に話すのを聞いた時だった。子どもにとっては、それはいつも周囲から聞くのとは違う話し方なのでおかしかった (komisch)。

兄はラジオを持っていたが、ルクセンブルク語の番組は聞かなかった。父がルクセンブルク語のメルヘンのレコードを買ってくれ、それも私にとって標準ルクセンブルク語との出会いのひとつだった。兄がよくそれを聞いていた。

3.2.2 小学校時代 (1960 年代)

最初の担任はヴィルツ出身の先生だったので、授業外での先生との会話ではすべて方言を話した。ヴィルツ以外の出身の先生は標準ルクセンブルク語を話した。児童同士は方言で話した。

当時は科目としてのルクセンブルク語の授業は行われておらず、Heimatkunde (郷土学) という科目があり、そこでルクセンブルク語の詩を暗誦したり、歌を覚えたり、ミッシェル・ロダンジュ (Michel Rodange) の „Renert“ を読んだりした。¹⁰ ルクセンブルク語の読み方や書き方を習ったりはしなかった。

当時は子ども用のルクセンブルク語の本はまだなかった。しかし、青少年用のルクセンブ

ルク語の雑誌があって、その中に„D’Maus Ketti“という作品やレンツ（Lentz）やディックス（Dicks）の作品が入っていて、両親が読み聞かせてくれた。¹¹ 学校では読み聞かせは行われなかった。

3.2.3 リセ時代（1960年代末から70年代）

当時は北部地域にリセがなかったので、エシュテルナハのリセに入り、7年間寮で生活した。その間両親に手紙を書くことはなかった。当時スイスで働いていた兄にはよく手紙を書いたが、それは方言で書いた。方言の綴り方は父に訊いて覚えた。父は「方言を書くのに規則はないのだから、話す通りに書くように」と教えてくれた。

当時、リセには外国人としてはイギリス人やフランス人、ドイツ人がいたが、みんなルクセンブルク語を話した。後に増えるポルトガル人やイタリア人はまだいなかった。

リセの先生には始めヴィルツ方言で話したが、そのうちそのことで先生にも他の生徒からも冷遇されるように感じたので、自分も標準ルクセンブルク語を使うようになった。しかし、帰省の折に一度父から言葉づかいの変化を指摘されたことをきっかけに、再び方言に戻し、その後ずっと方言で通した。リセの7年間で標準ルクセンブルク語をマスターしたとは感じていない。

ヴィルツ出身の他の同級生はすぐに標準ルクセンブルク語を話すようになった。彼らの中で卒業後に方言を話す人は誰一人いない。

3.2.4 大学時代（1970年代から80年代）

ウィーンの大学に通っていた間、ドイツ語が日常の言語だったが、ルクセンブルク人には方言を話した。他のルクセンブルク人は標準ルクセンブルク語を使った。両親や兄や妹との間の手紙は方言で書いた。

3.2.5 小学校勤務後

ウィーンから戻ってしばらく画廊を経営した後、1999年からヴィルツの小学校に勤務している。正式の教員免許をもたないまま教員として勤めていたが、当時、政府はそうした教員に資格を取らせようとしており、2年間集中してルクセンブルク大学教育学部に通い、二つの国家試験を受けて2008年に資格を得た。1年間は学校に勤務しながら授業のない日の午後や週末などに大学に通った。

教育学部の授業でルクセンブルク語の作文を書く時には、どうしても方言の影響による誤りが出てしまった。標準ルクセンブルク語の正書法は、特に三種類のeの区別が難しい。

現在の職場では、教員同士の間で自分は方言を使うが、ヴィルツ以外の出身の教員は標準ルクセンブルク語を使う。外国人児童もルクセンブルク語を話せるが、多くの教師は標準ルクセンブルク語しか話さないのので、児童も方言は否定辞のnikを除いて話さない[注：標準語の否定辞はnet]。ヴィルツ出身のルクセンブルク人と交流のある子は、少し方言の単語が交じることはある。

ポルトガル人教師、ポルトガル人の親や掃除婦とはフランス語で話す。旧ユーゴ出身の親や掃除婦とはドイツ語で話す。

3.2.6 現在の小学生の言語使用

担任をしているクラスの18人の児童のうち、親がルクセンブルク人なのは2人だけである。ルクセンブルク語の授業では、もちろん標準ルクセンブルク語を教える。子どもたちは小学3・4年生から学校でルクセンブルク語を読み始め、4年生の終わりにはルクセンブルク語で書くようになる。教室にはルクセンブルク語の本を置いて、誰でも読めるようにしている。ルクセンブルク語を母語とする子どもでも、ルクセンブルク語の本を読むのはドイツ語の本を読むより難しい。

子どもたちは小学生のうちからメールなどの交換をし出すが、彼らが使う言語はいろいろな言語の混じったもの(Mischung)である。外国人の親と一緒にスーパーに来た子どもたちがお互いにルクセンブルク語で話しているが、それを親が理解できない場合もあり、そのため子どもにとっては内緒話ができる。

ポルトガル人児童のためには、理科や社会の授業の一部がポルトガルから派遣された教師によってポルトガル語で行われる。ポルトガル人教師によると、ポルトガル系の子どもたちが書くポルトガル語には誤りがたくさん見られるが、それは彼らが習うのが標準ポルトガル語であるのに対し、家庭ではポルトガル語の方言を話しているからである。

ポルトガル系児童のドイツ語の作文に関しては、ドイツ語とルクセンブルク語の混淆がよく見られる。例えば、ある女子の書いた手紙の中では様々な言語の語が入り混じっていて、文の構造がわかりにくいものであった。ポルトガル語で始めた単語がルクセンブルク語で終わるということもある。ポルトガル人児童の中には、両親がすでにルクセンブルクで生まれたという子もいる。そうした児童は、ヴィルツ方言を理解することができる。

方言はだんだん使われなくなっている。店には外国人の従業員が多く、町全体で方言を聞く機会が減っている。

3.2.7 ルクセンブルク人の方言使用一般

たとえ標準ルクセンブルク語を話していても、言語的特徴から話し手の出身地がわかる。ただし、細かい町や村まで分かるのではなく、北部地域、モーゼル地域、南部地域といった地域単位で分かる。よく方言が話される地域は、北部、モーゼル、それに南部のエッシュである。そこでは若い人たちも方言を話す。一方、ルクセンブルク市からヴィルツへ引っ越してきた家族の子は、親が標準ルクセンブルク語を話すので、方言を話さない。しかし、将来その子の子ども世代は方言を話すかもしれない。

先日、南部地域に住んでいる女性と電話で話したが、私の方言が理解されず何度も訊き返された。そうしたことがたまに起こるものの、ルクセンブルク語の中で理解できない方言は基本的にはない。いくつか知らない単語があるだけである。ヴィルツ方言の中には、年長者しか使わない単語がいくつかある。また、標準ルクセンブルク語では使わないような過去形

の使用が年長者によく見られる。¹²

3.2.8 文章語

業務上の公的な手紙はフランス語で書く。規則としては三つの公用語のどれを使ってもいいのだが、フランス語を使う。私的な手紙でも、パリに住んでいるおばやいとたちにはフランス語で書く。オーストリア人の知人への手紙にはドイツ語を使う。ルクセンブルクの友人や知人とのメールや SMS [注：Short Message Service、携帯メール] は、ヴィルツ方言で書く。

3.3 W-2 (男性、20 歳代前半、会社員)

略歴：アーヘン大学に在籍した 2 年間を除き、ずっとヴィルツに住んでいる。両親と姉の 4 人家族。2013 年 11 月からルクセンブルク市にある情報関係の会社に勤務している。

3.3.1 家族・親戚との会話

自分と母と姉はヴィルツ方言を話す。父はクレルヴォー [注：ルクセンブルク最北部の地区の中心地] 出身なので、そこの方言を話す。ただし、父の母はニーダーヴァンパハ [注：ヴィルツの北西約 7~8 キロ] 出身なので、正確に言うと父の方言は、そこの方言とクレルヴォー方言の混ざったもの (Mischung) である。母方の祖母はザントヴァイラー [注：ルクセンブルク市近郊] の出身なので、私たちとはヴィルツ方言で話す。その他は標準ルクセンブルク語で話す。

3.3.2 小学校時代 (1990 年代末から 2000 年代前半)

先生とは方言で話した。ヴィルツ出身の先生は方言で話したが、たいていの先生は標準ルクセンブルク語を使った。子ども同士では方言を使い、時々カーベルデ出身の子にはフランス語を使った。教師は、ドイツ語での授業に生徒の理解の問題がある時にはルクセンブルク語を使った。特に最初の 2 学年でそうだった。ルクセンブルク語の授業では、正書法や文法を習った。8~9 歳からルクセンブルク語で書けるようになった。外国人など他の生徒は必ずしもそうではない。

3.3.3 リセ (2000 年代後半から 2010 年代初め)

ヴィルツのリセに通ったが、そこではヴィルツ出身者は 5~10% ほどしかいなかった。生徒同士の会話では自分はいつも方言で話した。理解されないときは標準ルクセンブルク語も話した。先生に対しても方言で話した。全体で 30-40% の生徒が自分の方言を話していた。リセ入学後に方言を使わなくなった生徒もいた。

メールや SMS でも方言を使った。外国人生徒にはフランス語で話した。外国人生徒同士の会話では、それぞれの母語が使われた。

3.3.4 大学時代

アーヘン大学に2年間通い、情報科学を専攻した。そこではヴィルツ出身は自分一人だけだったが、ルクセンブルク出身の学生とは方言で話した。

3.3.5 現在の職場

ルクセンブルク市にある職場でも方言を話す。顧客しだいでフランス語も使う。ルクセンブルク市で方言を話す人はほとんどいない。例外は自分以外には一人しか知らない。

3.3.6 他の人の方言使用

たとえ標準ルクセンブルク語を話していても、話し方で出身地はわかる。よく方言を話すのは、北部と南部(エッシュなど)の人たちである。自分が理解できない方言はない。しかし、みんながそうだと言うわけではない。

3.3.7 ヴィルツ方言について

北部方言を話すタイプのイメージは、農民であり、また性格的に頑固な人たち、例えば相手が理解しなくても自分の方言を話し続けるようなタイプの人たちである。方言はだんだん話されなくなっており、リセの時でも、男女ともに方言を話す人は少なかった。

ヴィルツ方言に男女差はない。世代差としては、若い世代の方言にはいくつかの古い語が失われているし、また英語との混合も見られる。

他の土地に引っ越した後でもヴィルツ方言を話し続けるかどうかは、人による。

3.3.8 文書での言語使用

職場の顧客との間のメールではフランス語とドイツ語を使う。また、アーヘン大学時代の知人との間ではドイツ語を使う。毎日、SMS やメールや Facebook で方言を使う。時々、方言を読めない人に対しては標準ルクセンブルク語で書く。方言の綴り方は習ったわけではなく、人によって異なる綴り方が見られる。しかし、コミュニケーションに問題はない。話す時には使うが、書くときに使わない方言形はないと思う。

3.3.9 読書について

ルクセンブルク語の文学作品としては、小学校の授業でメルヘンを読んだ。自分では「爆弾仕掛け人」(Bommeleecër)¹³ についての本を読んだ。ルクセンブルク人の子どもにとって、ドイツ語の本を読むよりもルクセンブルク語の本を読むほうが難しい。というのは、ルクセンブルク語の綴りにはドイツ語とフランス語の綴りが含まれているからである。

3.4 W-3 (女性、20 歳代後半、幼稚園教師)

略歴：ヴィルツで生まれ育った。妹が一人いる。両親も祖父母もみんなヴィルツの生まれ育ち。ヴィルツのリセを卒業後、ベルギーのナミュール大学で学んだ。大学時代はナミュール

ルに住み、週末だけ実家に帰った。その後、幼稚園教師となって3年経つ。現在は実家から独立して生活している。

3.4.1 家庭内・地域のクラブ活動

家庭では方言で話す。地域の合唱団と音楽クラブに入っているが、そこでも方言を使う。クラブの仲間たちとのメールは方言で書く。合唱団では、文書で方言を使うこともある。

3.4.2 小学校時代（1990年代後半）

先生と話すのは、標準ルクセンブルク語だったり方言だったりした。児童の間では方言を使い、通じないときは標準ルクセンブルク語も使った。当時、外国人児童は50 - 60%ほどだった。ルクセンブルク語の授業では、詩の暗誦を行った。授業で児童のドイツ語の理解に問題がある時、先生はルクセンブルク語を使った。

小学2年の段階でルクセンブルク語〔注：本人の記憶では方言であるとのこと〕を書いていた。SMSはリセに入ってから、メールは職場に入ってから使っているが、どちらも方言で書いている。

3.4.3 リセ時代（2000年代）

ヴィルツのリセ（Lycée du Nord「北部リセ」）のクラシック・コースに入った。¹⁴そこでは、1クラス15～20人中、ヴィルツ出身者は5～6人だった。それぞれの方言を使う生徒が自分も含めて半分位、標準ルクセンブルク語を使う人が半分位いた。性差は関係ない。リセに入ってからSMSを使うようになったが、方言で書いた。リセ入学後に方言を使わなくなった生徒もいた。それは他の生徒たちからかわれないためである。

3.4.4 大学時代

ナミュール大学教育学部に3年間通った。そこでは、ルクセンブルク出身の学生とは方言で話した。私以外のルクセンブルク人の学生は標準ルクセンブルク語を使った。

3.4.5 現在の職場

現在、ヴィルツの幼稚園に勤務している。自分の担当するクラス（15人の幼児）にルクセンブルク人は2～3人しかいない。園全体でも70 - 80%が外国人の子どもたちであり、自分が子どもの時よりも増えている。外国人のほとんどが、ポルトガル人や旧ユーゴスラビア人である。子どもたちにはふつう方言で話しかける。通じないときには普通のルクセンブルク語に置き換える。子どもたちに絵本を読み聞かせるさい、フランス語やドイツ語の本であれば、その場でルクセンブルク語に訳して読み聞かせるが、それは方言である。

子どもたちの親とは、ポルトガル人ならフランス語、旧ユーゴ人ならドイツ語を使う。保護者への通知文書では、フランス語、ドイツ語、ルクセンブルク語を使用する。ルクセンブルク語の場合、自分は方言も使うが、他の教員は標準ルクセンブルク語で書く。¹⁵同僚との

間の E メールでは、自分は方言で書くが、同僚は標準ルクセンブルク語を使う。

3.4.6 他の人の方言使用

ルクセンブルク語の話者であれば、たいてい話し方で出身地がわかる。よく方言を使う人の出身地は、クレルヴォー、ヴァイスヴァンパハとその周辺、モーゼル地方（レーミヒ、ヴァッサービリヒなど）、それに南部のエッシュである。方言を話すかどうかは、その人のキャラクターによる。移住すると、その方言が自然に入ってしまう。

3.5 W-4（女性、10 歳代後半、大学生）

略歴：ヴィルツで生まれ育つ。父はルクセンブルク人、母は日本人。両親はともに音楽関係者で、22 年前からヴィルツに在住。二人の兄がいる。ヴィルツの小学校を卒業後、ベルギーのバストーニュ〔注：フランス語圏にあり、ルクセンブルクとの国境沿いに位置する〕にあるリセに通った。現在はブリュッセルの大学で英語とロシア語を専攻している。

3.5.1 家庭内での言語使用

両親の間ではフランス語が使用される。母とは常に日本語で、兄たちとはヴィルツ方言で話す。父はルクセンブルク市出身で標準ルクセンブルク語を話す。父に対しても方言で話す。つまり、父と娘の間の会話では父が標準語、娘が方言を使用することになる。

3.5.2 幼稚園・小学校時代（2000 年代）

幼稚園の時、先生はヴィルツ方言で話していた。子ども同士も方言で話した。小学校の時も同じで、先生とでも子ども同士でも方言を話した。ルクセンブルク語の授業は小学校 4 年生までは行われず、5・6 年生で週 2 時間受けた。詩の暗誦や書き方を習ったが、作文はしなかった。ルクセンブルク語の本は読まなかった。小学 6 年生からメールを使っているが、友人とはヴィルツ方言でやり取りした。方言の場合、どう書いても正しいという感じで、聞こえているように書いた。

3.5.3 リセ時代（2000 年代後半から 10 年代前半）

地元のリセには通わず、バストーニュにあるカトリック系のリセ〔注：ベルギーのリセは 6 年制〕に通った。¹⁶ ここではフランス語を使用した。リセ 3 年生の時に理系のクラスに入ったが、5 年生で語学系のクラスに変更した。外国語としては 1 年生から英語を、3 年生からオランダ語とラテン語を習った。オランダ語の学習には、ドイツ語の知識が役立った。

3.5.4 現在（大学）

現在、ブリュッセルにあるベルギー自由大学で英語とロシア語を専攻している〔注：ベルギーの大学で外国語を専攻する場合、二つの言語を専攻する〕。大学ではルクセンブルク人同士の会話にルクセンブルク語を使う学生もいるが、自分はいつもフランス語を使っている。

3.5.5 日本語能力の保持について

幼い頃、毎年夏に1か月ほど日本に滞在した。日本の祖父が亡くなって以来この6~7年、祖母が毎年3か月ほどヴィルツに滞在している。祖母とは日本語で話し、また普段からファックスのやり取りをされていて、それが日本語を書く機会になっている。

これまでDVDで『ドラえもん』などを観た。漫画はたくさん読んだ。本では『ブリーチ』や『心霊探偵八雲』などを読んでいる。

[注：W-4氏の言語生活を知る上で重要と思われるため、子どもたちの日本語能力保持のための努力について、以下にW-4の母（日本人）から聞いた情報を加える。]

家では子どもたちには常に日本語で話しかけた。時々日本語の絵本も読んであげた。しかし、他の日本人との接触がほとんどないため、どうしても母親との会話だけで日本語を身に付けると、男の子が女ことばになっていった。

長男が7歳で、次男が5歳の時に、公文の国語を毎日10枚ずつやらせ、それを4年間続けた。バカンスに行く時でも、10日分100枚を持って行った。それを自分が毎日二人分の20枚を添削したので、たいへんだった。娘は幼稚園児の時に半年間だけそれをやった。

日本語では敬語をきちんと使えるかどうかが重要なので、この点については子どもを厳しくしつけた。例えば、子どもを迎えに行くとき、敬語を使って頼まなかった時は迎えに行かずに、ずっと立たせておくなど、身体で覚えさせるようにした。（以上、W-4の母による）

4. 考察

前章で報告したヴィルツ方言話者の言語生活に関する情報に基づき、以下ではルクセンブルク語話者の方言意識に関する先行研究も参照しながら、ヴィルツ方言話者にとっての方言使用の意味と今後方言が継承される可能性について考察する。

なお、上述の報告から明らかなように、本調査における協力者は全員がヴィルツ方言話者であり、しかも4人のうち3人は、ヴィルツ以外の場所でも、また相手が同じ方言の話者でなくてもヴィルツ方言を使用するという、かなり徹底した方言話者である。したがって、本稿が報告する事例は、ヴィルツ方言話者一般を代表するものではなく、ましてやヴィルツの住民全体の傾向を示すものではないことに留意しなければならない。

4.1 ルクセンブルク語話者の方言意識

ルクセンブルク語話者の方言意識に関しては、第2回バレーヌ調査とよばれる、電話による大規模な調査が2004年に行われており、その結果がFehlen (2009)の第8章 (Variations régionales) でまとめられている。田村 (2014) でも紹介したが、以下、その調査結果から本

稿に関わる内容をいくつか紹介する。

この調査では、第一言語であるかどうかを問わずルクセンブルク語話者である 1423 人が対象とされた。まず「ルクセンブルク語の話し方から話し手の居住地がわかりますか」という質問に対して、73.3%の人が「わかる」と回答した。ルクセンブルク語が第一言語である人(953人)だけに限定すると、この回答は86.4%に上る。全体の年齢層別では、概して上の年齢層ほど高い比率になり、特に65-70歳では91%であった。これは、この年齢層には外国人が少ないからかもしれない。

この結果は、ルクセンブルク語話者が方言の違いに敏感であることを示すが、実際、本稿の協力者 W-1、W-2、W-3 の 3 人も、ルクセンブルク語の話し方から話し手の出身地がわかると述べている。

次に、「自分の居住地の人たちがその話し方から人に居住地が知られると思いますか」という質問に対しては、全体で62%の人が、またルクセンブルク語を第一言語とする人に限定すると70.8%の人が、「そう思う」と回答した。全体の結果を居住地区で比べると、「そう思う」という回答者が、上位から順にクレルヴォーが約80%、ヴィルツが約75%と北部の地区が1位と2位を占めた。また、前の質問(話し方から人の居住地がわかるか)に「わかる」と回答した人に限定すると、「そう思う」と回答した人が全体で74.1%になり、居住地区別では、ヴィルツがクレルヴォー、フィアンデン、レダンジュと並んで100%に上った。すなわち、ヴィルツをはじめとするこれらの4地区では、方言の違いがわかると自認している人が、自分の地域の方言も人に知られていると意識していることになる。

さらに、この問い(話し方から自分の居住地が人に知られるか)に「そう思う」と回答した人(882人)に対して「あなたの居住地では、どのくらいの人たちが地域特有の話し方をしますか」と質問し¹⁷、「ほぼ全員」、「多くの人」、「それなりの数の人」、「年配の人たちのみ」、「その他」から選択してもらったところ、ヴィルツ地区居住者の回答は、「ほぼ全員」が42%、「多くの人」が21%で、これらを合わせた数値(63%)は他の地区に10%以上の差をつけてトップであった。¹⁸また、ヴィルツにおいて「それなりの数の人」は8%、「年配の人たちのみ」は25%であった。

この結果は、特にヴィルツ地区では、自分の居住地の方言の存在を意識している人ほど、自分の周囲の人たちも地域の方言を話すと考える傾向が全国で最も強いことを示す。しかし他方において、本稿の協力者 W-1、W-2、W-3 の 3 人はともに、自分の周辺で方言を使わない、あるいは使わなくなった人たちが多数存在することを指摘しており、その傾向を代表してはいない。

さらに、上と同様、「話し方から自分の居住地が人に知られるか」という質問に「そう思う」と回答した人に対して、「あなたは自分の地域の人たちと同じ話し方をしますか」と質問したところ、「はい」という回答の比率は地区ごとに大きな相違が見られたが、ヴィルツでは60%というやや低めの比率であった(Fehlen 2009 には全体の平均値は示されていない)。これは、ヴィルツ方言の存在を意識していることが必ずしも自らヴィルツ方言話者であるとは限らないことを示す。

また、この質問に「いいえ」と回答した人に対して「なぜですか」と質問したところ、ヴィルツ地区では、「他の地域で生まれた」が60%（全体で53%）、「話さなくなった」が20%（全体で7%）、「家庭の話し方ではない」が20%（全体で22%）であった。この結果から、ヴィルツでは、自らを地元の方言話者ではないと意識している人の大半が他の地域からの移住者であるか、あるいは親が他地域の出身者であるといえるが、一方でかつて話していた方言を話さなくなったと意識している人たちが他地区よりも多く存在することがわかる。

3.1節で述べたように、ヴィルツ自治体に限ると1985年から2015年までの30年間に人口が2倍以上に増加した。外国人の移住もそれに寄与したと思われる。人口の増加にともないヴィルツ方言を話さない住民の比率も高まったであろう。本稿の協力者W-4氏の両親も他の地域からヴィルツに移り住んだため、ヴィルツ方言話者ではない。しかし、ヴィルツで生まれ育ったW-4氏はヴィルツ方言話者であり、父とも兄たちとも方言で話す。このように、家庭を媒介とせず地元の方言を継承する若年層も存在する。

以上のバレーヌ調査の結果も踏まえ、次節では本稿のインタビュー調査の結果に基づき、ヴィルツ方言話者にとっての方言使用の意味と方言が継承される可能性について考察する。

4.2 方言使用の意味と方言の将来

調査協力者の4人は、全員が高等教育を受けたか現在受けており、高学歴層に属す。中年層のW-1氏と若年層のW-2氏、W-3氏の3人は、子どもの時から、外国での滞在を経て現在に至るまで、生活の多くの場面でヴィルツ方言を使用している。また、W-4氏の場合は、リセの時からフランス語圏の学校に通っており、それが現在の大学の中でルクセンブルク人同士の会話にもフランス語を使用する大きな要因であると思われるが、家庭内では現在でも方言を使用する。このことから、ヴィルツでは、方言話者数は減少しているとしても、少なくとも現在の20歳前後まで方言を継承している人が一定数存在すると言える。

インタビューで得られた情報から、リセ入学後に方言使用を止め、標準ルクセンブルク語を使用し始める生徒が相当数いることがわかった。小学校と異なり、リセには様々な地域から生徒が集まる。いくつかの方言が接触しあう中で、地域的に中立な標準ルクセンブルク語への移行がなされるのであろう。W-3氏とW-2氏によれば、2000年代から2010年代初めのヴィルツのリセでは、自分の方言を使う生徒の割合が約半数(W-3氏)あるいは30-40%(W-2氏)であった。

W-1氏の場合は、1960年代後半にエリート校として知られるエシュテルナハのリセに入学したが、そこでは教師も生徒もみんな標準ルクセンブルク語を使っており、他のヴィルツ出身者はすぐに全員が方言から標準語に移行した。W-1氏も一度は標準ルクセンブルク語を話し始めたものの、後に家族と同じ方言を話し続けることを選択した。家族との絆を保つ上で方言使用が重要な意味を持っていると考えられる。

また、どんな言語であれ、方言使用には地域アイデンティティを示すという機能があると考えられるが、本稿の調査協力者たちに関しては、全員が高学歴で複数の言語に精通していること、さらにW-1、W-2、W-3の3人については、同じ方言の話者でないルクセンブルク

人に対してもヴィルツ方言で話すことを考慮すると、彼ら・彼女たちの生活の中で地域アイデンティティがかなり大きな部分を占めているのではないかと思われる。

W-1、W-2、W-3の3人は、日常的に方言を話すだけでなく、友人や知人とのメールのやり取りでも方言を使用する。また、W-1氏はかつて家族との間での手紙の交換に方言を使用しており、W-3氏は勤務先の幼稚園の保護者宛ての文書や地域の音楽関係のクラブの文書に方言を使用することもある。手紙や文書を方言で書くということがヴィルツ方言話者全般に広く見られるかどうかは不明であるが、こうした文章語での方言使用は、田村（2014）で報告したようにヴィルツでは地域行事のパンフレットなどにも見られる。またW-1氏によれば、W-1氏の父も若い時から（特にナチスドイツの占領下、軍に徴用された1940年代後半に）家族宛ての手紙に方言を使用したとのことである。¹⁹

ヴィルツ方言は、上述の「破裂音 /d/ の前における長母音または二重母音の軟口蓋音化」をはじめいくつか顕著な特徴を持つが、日常的にこの方言を使用する人たちにとっては、方言とはっきり異なる標準ルクセンブルク語の使用にはある種の「改まり」が感じられ、それを避けるために、特にプライベートな領域でのメール等の文章語において日常の言語である方言が使われると考えられる。また、ルクセンブルクでは文章語としては主としてフランス語とドイツ語が使われるため、その分標準ルクセンブルク語による文章になじみが少ないという面もあるであろう。

しかし一方で、第1章で述べたように、近年マスメディアにおいて標準ルクセンブルク語の文章語としての使用が増えている。また、この十数年の間に学校でのルクセンブルク語教育のための補助教材（小学3・4年生用、5・6年生用、リセ用の読本）が教育省によって刊行されるなど、これまで以上に子どもが標準ルクセンブルク語の文章語に接するようになっている。そうしたルクセンブルク語をめぐる変化と並び、外国人居住者の急増という現象も今後の方言使用に大きな影響を与えるであろう。

W-1氏が子どもだった1960年代のルクセンブルクにはまだ外国人居住者が少なかったが、その後ポルトガル人を始めとする外国人居住者が急増した。その状況がヴィルツにも及んでいることが、W-3氏とW-1氏の叙述から裏づけられる。W-3氏が小学生だった1990年代後半には児童の50 - 60%が外国人であったが、その比率はその後高まり、W-1氏とW-3氏が現在勤めるヴィルツの小学校と幼稚園では、ルクセンブルク人よりも外国人の子どもの方が圧倒的に多くなっている。2.2節でルクセンブルクが直面する外国人教育の問題に言及したが、実際にW-1氏の叙述から、ポルトガル人児童が言語習得に様々な問題を抱えていることがわかる（3.2.6節）。

ルクセンブルク語を母語とする子どもが同世代の中で相対的に少数派となっている状況の中で、ヴィルツ方言は果たして今後も受け継がれていくのであろうか。

この点に関して重要な要因になると思われるのは、教師の言語行動である。W-1氏とW-3氏は、それぞれ小学校および幼稚園という教育現場で子どもたちに対して主として方言で話しかけている。そこではヴィルツ出身の教師だけが方言を使用するようであるが、子どもたち、特に外国人の子どもたちにとって、ルクセンブルク人の大人のモデルとなる教師が方言

を使うことは、子どもたちの方言に対するイメージに肯定的な作用を及ぼすのではないかとと思われる。

特に注目したいのは、若い女性教師の W-3 氏である。日本を含め一般に、方言使用者の典型は年齢と性に関しては高年層の男性であるが、彼女はその逆であり、さらに一般に方言を回避する傾向が強い高学歴層にも属す。W-2 氏の叙述にあるように、ヴィルツ方言を含む北部方言には伝統的に「農民」のイメージが付き纏うのであるが、W-3 氏のような若い女性が方言を使い続けることによって、そうしたイメージが、特に外国人の子どもたちからは、払拭され、むしろ「自然」や「伝統」といったプラスのイメージが付与される可能性もあるのではないかと考えられる。

筆者は一連のインタビューの中で W-2 氏の姉（リセ教師）とも会うことができたが、彼女が幼稚園に通っていた頃（1990 年代前半）すでにヴィルツに長く住んでいる外国人の子どもはヴィルツ方言を話していたとのことである。²⁰ 外国人居住者の多くが永住を前提にルクセンブルクで生活していることを考慮に入れると、今後国籍に関わりなく子どもたちの第一言語がルクセンブルク語となり、そして、たとえ多数派ではなくても、その中で方言に地域アイデンティティを感じる人たちが、プライベートな場面で主として方言を用いる可能性があると考えられる。

調査協力者たちの叙述から、ルクセンブルク人の多くは話し手の細かい言語的特徴（例えば、3.3.1 節で述べたように、W-2 氏の父の話し方がクレルヴォー方言とニーダーバンパハ方言の混合方言であること等）に気づき、それに基づいて出身地域を推測する。方言の相違に対する意識はどの国や地域においても見られることではあるが、ルクセンブルクのような小国では、それが全国的規模で意識され地域アイデンティティと結び付くように思われる。多言語国家であるルクセンブルクにおいて、国民アイデンティティを担うのはルクセンブルク語であるが、方言はそれに加えてさらに地域アイデンティティを示す手段として機能していると考えられる。

ルクセンブルクの外国人居住者は今後も増えると予測されている。外国人も含め、現在の若いルクセンブルクの人たちの将来の子どもたちが、居住する地域の方言を継承するのかが注目したい。

謝辞

* 本稿は、科学研究費補助金に基づく研究成果の一つである（基盤研究 C、課題番号：25370472、課題名「ルクセンブルク語地域変種の文章語での使用に関する研究」、研究期間：平成 25～27 年度）。また、本稿は 2015 年 5 月 30 日に行われた日本独文学会（武蔵大学）での研究発表「ルクセンブルク語北部方言の文章語での使用」の内容の一部を発展させたものである。インタビュー調査に協力してくださった方々に感謝の意を表したい。

注

1 ルクセンブルクの言語法とその成立過程および背景については、田村（2005）を参照。

- 2 ルクセンブルク政府の統計局 (www.statec.lu) のデータに基づく。
- 3 田村 (2010) を参照。
- 4 筆者の知る最新の情報も加えたが、主として Berg (1993) に基づく。
- 5 この台本の分析に基づくヴィルツ方言の特徴については、Tamura (2011) を参照。なお、「地区」はルクセンブルクの行政区 Kanton の訳である。全国に 12 の地区が存在する。各自治体は地区の下に置かれる。
- 6 クレルヴォー地区でのインタビュー調査については、田村 (2016 予定) を参照。
- 7 ヴィルツ自治体の職員に直接問い合わせて得られた情報に基づく。
- 8 特に筆者と同世代である W-1 氏とは何度も会い、また帰国後もメールで連絡を取り合っている。2014 年の調査が実施できたのはひとえに W-1 氏のおかげである。
- 9 Fehlen (2009: 181-2) によれば、同様のエピソードを言語学者の Alain Atten 氏も報告している。
- 10 Michel Rodange (1927-76) は 19 世紀のルクセンブルク文学を代表する作家であり、その代表作『レーネルト』はゲーテの『ライネッケ狐』を模した風刺的な叙事詩である。
- 11 „D’Maus Ketti“はオーギュスト・リエシュ (Auguste Liesch, 1874-1949) が 1936 年に出版した作品で、イソップ物語の「都会のネズミと田舎のネズミ」を模した寓話である。また、レンツ (Michel Lentz, 1820-93) とディックス (本名は Edmond de la Fontaine, 1823-91) は、ロダンジュと同様、19 世紀を代表する作家たちである。
- 12 クレルヴォーの調査協力者からも同じ内容の情報が得られた。田村 (2016 予定) を参照。
- 13 ルクセンブルクで 1984 年から 86 年までの間に連続して起こった公共施設や住宅などへの爆弾事件を指す。犯人はまだ捕まっていない。
- 14 ヴィルツのリセには、クラシック・コースとテクニク・コースが併設されている。
- 15 保護者への連絡文書を方言で書く例は、クレルヴォー地区のある小学校でも見られる。その実例は、田村 (2016 予定) を参照。
- 16 W-4 氏の母によると、ルクセンブルク北部地域からバストーニュのリセに通う生徒はかなり多く、通学用の 60 人乗りのバスがヴィルツから 1 台出ている。この他、クレルヴォーからは 2 台、ディーキルヒからも 1 台出ている。皆がエリート校に通うわけではなく、特にドイツ語能力に問題のあるポルトガル人の生徒など、ルクセンブルクのリセの授業に付いて行けないためにベルギーのリセに通う生徒もいる。ルクセンブルクのリセでは同じ学年を 2 回落第すると退学になるため、こうした現象が起こる。
- 17 この点に関し田村 (2014: 31) では、「(発音から人の居住地域が)わかる」と回答した人に対して「あなたの居住地域では、どのくらいの人たちが地域特有の話し方をしますか。」と質問し、・・・と説明したが、誤解であった(上の下線部)。本文のとおり訂正する。これに関連して、Fehlen (2009: 177) のグラフ 37 の説明 (Si L20=OUI など) にある質問番号を示す L20 は、説明内容や回答者の実数から L21 の誤植であると思われる。
- 18 この二つの選択肢を合わせた比率の 2 位は、一般に標準ルクセンブルク語が話されると見なされているメルシュであった(「ほぼ全員」36%、「多くの人」15%)。このように、「地域特有の話し方」には標準ルクセンブルク語も含まれることに留意しなければならない。
- 19 軍隊内から家族への手紙はドイツ語で書くことが義務付けられていたが、検閲を通るように、全体としてドイツ語の文章の所々にヴィルツ方言を忍び込ませたとのことである。

20 W-2 氏の姉に対するインタビューの結果は、録音の不備のため、残念ながら本稿で報告することができなかった。

参考文献

- Berg, Guy (1993): »Mir wëlle bleiwe, wat mir sin« *Soziolinguistische und sprachtypologische Betrachtungen zur luxemburgischen Mehrsprachigkeit*. Tübingen (Niemeyer).
- Gilles, Peter (1999): *Dialektausgleich im Lëtzebuergeschen. Zur phonetisch-phonologischen Fokussierung einer Nationalsprache*. Tübingen (Niemeyer).
- Fehlen, Fernand (2009): *Une enquête sur un marché linguistique multilingue en profonde mutation. Luxemburgs Sprachenmarkt im Wandel*. Luxembourg (SESOPi Centre Intercommunautaire).
- Tamura, Kenichi (2011): The Wiltz Dialect in a Luxembourgish Drama for Children: Analysis of the Script for “Den Zauberer vun Oz” (2005). 『愛知教育大学研究報告』第 60 輯人文・社会科学編、11-21 頁（愛知教育大学）
- 田村建一（2002）「ルクセンブルク語諸方言の変容—Gilles (1999) の調査より—」『Sprachwissenschaft Kyoto』1、65-78 頁（京都ドイツ語学研究会）
- 田村建一（2005）「第 6 章 ルクセンブルク」渋谷謙次郎編『欧州諸国の言語法』293-7 頁、三元社
- 田村建一（2010）「ルクセンブルクの多言語教育と外国人児童生徒」『ルクセンブルク学研究』第 1 号、21-45 頁（ルクセンブルク語コイネー研究会）
- 田村建一（2014）「ルクセンブルク語話者の方言意識と文章語での方言使用—ヴィルツ方言を中心に—」『ドイツ文学研究』46、29-42 頁（日本独文学会東海支部）
- 田村建一（2016 刊行予定）「ルクセンブルク語クレルヴォー方言の特徴 文章語としての使用例の分析」『愛知教育大学研究報告』第 65 輯人文・社会科学編（愛知教育大学）

執筆者紹介

氏名：田村 建一

所属：愛知教育大学日本語教育講座

Email：ktamura@aeu.ac.jp